

中山間地で

「ご飯が食べられなくなったら、どうしますか」。琵琶湖の南東部、滋賀県東近江市にある永源寺診療所の医師花戸貴司さん(44)は、お年寄りを往診するたびにそう問い掛ける。全国各地の中山間地にある集落には、住み慣れた自宅で最期を迎えたいと願う人たちがいる。そんな願いに寄り添う医師の姿を追った。(林勝)

十数軒の集落にある一軒の民家。一人暮らし約二十歳のきぬさん(元)が、大きな背もたれの椅子に体をあずけ、訪問介護の女性が作る朝食を静かに待っていた。土間のかまどは、火が絶えて久しい。

「足の具合はどうですか」。花戸さんの呼び掛けに、きぬさんは「おかげさまで」とにっこり。脳梗塞の後遺症で足腰に不安を抱える。一月前には右足が

死は日常の先にある

感染症で腫れ上がったが、大事に至らず経過は良好のようだ。耳が遠く、会話には集音マイクとヘッドホンが欠かせない。

テーブルの端に置かれた水の入ったコップに目を留めた花戸さん。「頑張って水をお供えしてますね」。隣の部屋には、天井近くにあるはずの神棚が化粧台ほどの高さに移されている。「お供えできることが励みのよう



往診で91歳の女性に声を掛ける花戸貴司さん(右)。中山間地での訪問医療に力を入れる＝滋賀県東近江市永源寺地区で

です」と介護の女性。花戸さんは「ここでは神様も降りてきて、医療介護の輪に入るんですよ」と笑った。

別れしな、花戸さんが問い掛けた。「おかあさん、もし動けんようになったらどうする」。市街地に住む長男からの「一緒に暮らそう」を断り続けてきたきぬさんの気持ちは決まっている。「ここにいたい。気ままに暮らせます」と手を合わせた。

医療は地域づくりの視点必要

滋賀・東近江市 花戸医師

在宅みとり

花戸さんは同県長浜市出身。人員、設備、最新医療技術の整った大病院で勤務後、地域医療を志した。永源寺地区は人口約五千八百人で、六十五歳以上の高齢者が占める割合(高齢化率)は30%超。もっと山奥では60%を超す集落もある。

「先生、もうあかん」。ある患者の家族のひと言が、花戸さんの心に刻まれている。診療所に赴任した十五年前、難病の六十代男性宅に足しげく通った。食事ができなくなった男性の命を守ろうと、点滴や薬の投与にこだわっていたとき、男性の妻のつぶやき「背中越しに聞こえた。日に日に弱る男性の状態を家族は分かっていたが、死を受け入れていなかったのは自分だけだった」。男性は二日後に亡くなった。命を一日でも延ばすのが医師の役目と思ってきたが、初め

ての在宅みとりであっけなく否定された。

診療を続けるうち、地区で亡くなる人の半数以上が自宅で最期を迎えているのを知った。重い病気や認知症が進んでも畑仕事や飼い犬の散歩を欠かさず、自分なりに生活のリズムを刻む。寝たきりになっても、孫やひ孫のことを気にかけての姿などに出会った。

「死は、遅かれ早かれ日常の先にあるんです」。そのため、ケアとみとり。訪問看護師や介護士ら専門職の連携と、近所同士で支え合う互助をつまくつなげるため、きめ細かなコミュニケーションに努める。

「在宅医療には地域づくり、まちづくりの視点が大切なんです」と話す。

花戸さんは、永源寺の地域医療とみとりをまとめた本「ご飯が食べられなくなったらどうしますか? 永源寺の地域まるごとケア」(農文協)を三月に出版した。千九百四十四円。問い合わせは農文協 電話03(3585)1114へ。